

## 北京近代科学図書館の〈日本〉

### 一 はじめに

歴史のなかで書物は、言葉に固有する諸相を担い、文明や文化、技術、政治制度や思想など諸々を形成するのに大きな役割を受け持ってきた。人間の抽象的・具体的営為のある部分を確実に書物が担ってきた。それは一国内においてもそうであり、異国間・異文化間にあつてはその任はいっそう顕著であつた。

それらを跡づけることは、その国に流通し持ち渡らせ遺された書物を丹念に検討することで可能であるかもしれない。こうした文献学・書誌学的な作業は、地味で時間のかかることではあるが研究の基層としては不可欠な作業である。そしてそれらはたとえば江戸時代や幕末期の唐船持ち渡らせ本の研究や蘭書将来本の研究等々成果があげられている。

岡村敬二

また異文化・異国間の交渉として、書物自体の物理的な動きや書写などによる伝播とは別に、その中身の移し替え＝翻訳という形で文化や技術の移動が成し遂げられる場合もあろう。それは一般には、とりわけ文明・技術面にあつては、上流からの流入や大きな波立ちからの伝播という形をとるのであろうが、それもそれぞれの国や地域、時代により多様な異なりをみせよう。こうしたことはその国に遺された書物を〈群れ〉として見ることににより、また激動の歴史に生きた機関の蔵書群を検討してみることにより時代や国の〈対流〉の様子が見てとれよう。その書物の移動や翻訳という〈対流〉は、平穏な時代に徐々に流入した場合もあるしまた戦争や侵略のよみにある面強制力を伴う場合もある。

ところで現在中国に日本語図書がどれくらいあるだろうか。少しまえの対談ではあるが中国社会科学院日本研究所副所長彭晋璋は梅

棹忠夫との対談<sup>(1)</sup>で「あと問題としては、資料のことがあります。中国全体で日本の書物は約四二万冊しかないんです」と述べ更に「しかも、そのほとんどが、戦前、中国にいらっしやった日本のかたが終戦のときに中国に残された書物です」とつづけている。また同じくこの彭晋璋がとりまとめた『中国における日本研究』<sup>(2)</sup>（一九八七年）には日本研究機関として、社会科学院・大学・学術団体など六三機関があげられ、その蔵書のうち日本語図書はやはり四二万冊、その大部分は古書である、と報告している。

ただ、この報告は社会科学院や大学など研究機関の蔵書数であり、戦後期、満鉄蔵書や日本図書館の蔵書として接收され中国に収蔵されたであろう北京図書館や大連・瀋陽・哈爾濱・上海など公共図書館の日本語図書<sup>(3)</sup>はふくまれていない。それらを含めると、トータルの在中国の日本語図書数は七、八〇万冊程ではないかと予想される。また北京図書館では日本書籍出版協会から日本出版物の寄贈を継続して受け、日本図書室<sup>(4)</sup>をもうけており、さらに北京外国语学院日本研究中心にも国際交流基金の援助で日本語図書が集積<sup>(5)</sup>されているなど、今後も日本語図書は増加していくことは間違いないだろう。

それでも現在の中国に存在している日本語図書の過半は戦前日本本の図書館や諸機関が遺<sup>(6)</sup>していった資料である。先の対談で彭は日本側から接收した本について「中国ではいま、そのような本が大変貴重な資料になっています。しかし、現代の日本で活躍されている

学者の書物とかが、全体からみてひじょうにすくないです」と述べている。その前半部分はほとんど外交辞令であろう。たしかにある意味では「貴重な資料」にちがいない。しかしこれら遺蔵書を使つての日本研究はいささか特殊な歴史研究となり、広範な日本研究のために全く資料が足りないというのが実情であろう。つまり、中国に遺された図書は現在の時点での日本研究にはほとんど役に立たないと、彭は発言しているのだと思う。

このように、現在中国に存在している日本語図書群の主力はいくつかの日本機関の蔵書を別にすれば大連・奉天（現瀋陽）・哈爾濱の満鉄社業の図書館および満鉄沿線図書館の蔵書、そして「対支文化事業」による北京・上海両日本図書館の蔵書、ほか北京・天津・上海の日本機関の接收図書などである。それらは日本の侵略や戦争、植民地支配や敗戦といった歴史に同伴するいわばドラスティックな書物の移動・蒐集・遺蔵であった。もちろんそれまでも書物の物理的な移動はあった。明治初期に清国の日本大臣随員として来日した楊守敬は主として日本伝来の中国古書ではあるが大量に蒐集して中国に持ち帰ったし、明治末期には岩崎氏が陸心源旧蔵書を購入し日本に静嘉堂文庫としておさめたりした。これら書物の対流はそれとして大層興味をひかれるところだがその書物群は、歴史性や時代性を満身に帯びているわけではなく、したがって《日本》や《中国》という異国・異文化を直接照射するものではない。この時代に

〈日本〉を表出した書物を見るにはやはり歴史の激動を生きた先の遺蔵書の検討が不可欠であろう。

こうした〈日本〉の表出は、日本語図書中国語訳という翻訳図書を検討することによってもまた跡づけることができる。つまり、どの国のなにを翻訳しなにを学ぼうとしたか、中国の場合日本のなにを得ようとして日本語図書のどの分野の図書を翻訳したのかといったことである。そしてこうした翻訳の交流史全体を考察することは一国の近代化過程を検討することにもつながる。たとえば日本・中国の翻訳の歴史においては日清・日露戦争の時期に各翻訳の点数が逆転したわけだが、そうしたこともその時代その国の近代の不均衡な「位置」を指し示しているといえる。

さらに異国間どうしの研究書やその国の旅行記・留学記もそうした局面をかいまみせる。つまりある時代の、中国における日本研究図書や東游记の類がそうである。

以上のことを検討するのに本稿では北京近代科学図書館をとりあげる。それは該図書館が「対支文化事業」の一環としての植民地日本図書館として以上述べた幾種類かの資料を蒐集しまた熱心に展覽し、さらにそれら日本語図書を読むための日語講座を開催していわば〈日本〉を顕現しようとしたからである。つまり、植民地図書館・日本図書館ということとその活動の中心に〈日本〉を据え、蔵書に日本語図書や中訳日文書など翻訳書、東游记や中国人の日本研

究図書を蒐集したのである。それもある種明確な目的意識をもった蒐集でありそれらはまさに〈日本〉図書群であったといえる。だからこそ逆にいうと戦前期海外の日本図書館のなかで該館は圧倒的にきめの細かい、よく整備された図書館であったともいえる。つまりソフトにしつらえられた文化侵略の図書館であったわけだ。

ここではまず北京近代科学図書館の設立経過や資料の蒐集、〈日本〉に関わる諸活動を概観し、さらに近代の中訳日文書・日訳中文書の翻訳交流史と図書館でのその蒐集を検討することでこの時代の異国・異文化を見る眼差しについて想いを巡らしてみたいと思う。

## 二 北京近代科学図書館の〈日本〉諸活動

**設立経過** 北京近代科学図書館の創設は、義和団賠償金を教育・文化面にあてていわゆる「対支文化事業」を振興させ中国進出策を容易ならしむるための外交政策の一環であった。

以下、設立の経過を簡単に述べる。<sup>(7)</sup>一九二三年、「対支文化事業特別会計法案」が可決され、いわゆる「対支文化事業」がこの年より正式に開始されることになった。そして時期を同じくして中国から視察団が来日しこの「対支文化事業」に対しての中国側からの要望がだされている。その要望とは、事業の選定などにあたる機関は日中同数の委員により構成されること、また（古学の保存をはかるような）図書館・博物館など普遍的永久的な事業に使われること、

病院・学校などの建設に充当することは反対であること、であった。こうした中国側の要求をうけたかたちで一九二四年五月に汪―出淵協定がむすばれて、中国側の意見も十分尊重し北京に図書館・精神科学研究所を設立することなどが確認され、この文化事業は日中の共同事業となった。

そして実務レベルの交渉のち一九二五年五月にとりかわされた沈―芳沢交換公文では、事業の運営機関として東方文化事業総委員会の創設がうたわれ、その第一回総会では北京人文科学研究所・上海自然科学研究所の設立が議題にのぼっている。そして北京に建設する図書館の創設準備のため図書籌備委員が任命され、「東方文化図書籌備処章程」が定められた。これは二七年に「図書籌備処章程」とってかわられたが、それによると蒐集図書は四庫全書統修に必要な図書とされ、つまりここで構想された図書館は善本を中心とした漢籍中心の図書館であり、北京人文科学研究所の付属図書館という性格のものであった。そしてこの北京人文科学研究所は二七年一月二月に成立会がもたれて王府井大街に創設なった。

ところが二八年五月に勃発した済南事件で日中関係が一気に悪化し総委員会の中国側委員は総辞職、この事業も中断するにいたった。その結果この事業も日本による単独事業となり、とりあえず二八年一二月、北京人文科学研究所図書館・上海自然科学研究所両館の新築費を繰り延べるかたちで日本国内の東京・京都に東方文化学院の

研究所を設けることとした。さらに一九三一年の満州事変にいたって日中関係は破局をむかえ、北京に図書館建設という汪―出淵協定以来の構想もついで、結局、北京人文科学研究所には研究所の一部分として図書館がもうけられ、独立した図書館を、という構想はひとまず終息した。

こうしたなか、軍と結んだ新官僚の台頭で東方文化事業の見直しの機運がたかまり、さらに外務省文化事業部派遣第三種補給生として留学していた山室三良による、北京に日本図書館を設立すべしとの進言とがむすびつくかたちで新たな展開をみせる。すなわち一九三五年一〇月、在中大使館参事官若杉要により「北平人文科学研究所ノ改組並日本図書館開設案」が出されたのである。その内容は、人文科学研究所を文化事業部が接收し北平日本図書館に再編する、もしくは研究所はそのままとし実際上は日本図書館に改編する、そして日本の書物を収蔵し従来の漢籍とあわせて一般に公開・閲覧するといったものであった。この方針は三六年にはほぼ決定し、「北平近代科学図書館ニ関スル件」の「確定方針」では設置場所を人文科学研究所構内（王府井大街）とし備付ける図書を「日本ニ於テ最近刊行セラレ且権威アル科学ニ関スル學術書及日本ノ産業ニ関スル書籍」とし、開館の準備にかかった。かくしてこの北京近代科学図書館は一九三六年一二月開館の運びとなったのである。

#### 蒐集図書および図書目録

北京近代科学図書館は北京に建てら



れた、まったく〈日本〉図書館であった。同じように「対支文化事業」で上海に設立された図書館は、上海日本近代科学図書館と名付けられている。この「日本」「日本図書」の言葉の解釈は微妙でかつそれぞれの思惑がこめられていた。つまり当初外務省筋の蒐集しようとした日本図書は、「日本ニ於テ最近刊行セラレ且權威アル科学ニ関スル學術書」で、すなわち北京人文科学研究所であつたつていた漢籍（人文科学）に相對する近代科学（自然科学・工学）図書であつた。そして第一次の蒐集図書はこの線に沿つて蒐集がなされた。これに對して山室は、北京には理系学部を持つ大学は二校しかなくこれに比べて文系は八校あり、予想される図書館利用者である大学研究者や学生を考慮すると文科・法科關係の図書も必要であること、また辞書や専門書・百科事典等参考図書や日本語に關する図書の蒐集も緊要であると本省を説得した。結果、以後はこうした図書の蒐集にもつとめることとなる。

この言い分にはそれぞれに理があると思う。まず山室は、設立當時の「図書館一年史略述」<sup>(8)</sup>で、北京の高級中学では科学關係の教科書は英米の原書を使用しており大学にて自然科学・技術方面の日本語の参考図書を利用するものは皆無、と述べて外務省の蒐集方針を批判している。しかしながら、のちに詳しくみるように中国の日語翻訳事情とその一般の利用を考慮に入れるとかならずしもそうともいいきれまい。むしろ山室は、科学図書を排除しようとしたのでは

なく日本を紹介する図書・日本図書を中心とする日本紹介図書館を構想していたわけであり、ために科学關係の図書を中心とする外務省筋の蔵書構築を批判したのであろう。

一方、外務省新官僚の構築しようとした、いわゆる「近代科学」に象徴される意味合いはつぎのようなことであつたとおもわれる。つまりかれらは、個々の人間からではなくそこから独立した人間關係としての<sup>(9)</sup>、つまり物質的基礎Ⅱ下部構造から日本という国家を形成しようと考え、そのひとつの表われとしての近代科学關係図書の蒐集を主張したのではないか。つまり、例えば個々人にかかわる人文科学ではなくマスとしてとらえた構造としての近代科学（例えば自然科学）ということである。大上段に構えていえば彼らは国家の成立根拠を問うていたのであり中国の植民地經營の文化政策を個々人からではなく体制としての近代化・工業化ととらえて遂行しようとし、中国に物質的基礎としての〈日本〉を植え込もうとしていたのだと思う。そして山室はといえば、日本を體現するのに資料をもつて個々の人間に對応し〈日本〉を紹介しようとしたのだといえる。蒐集図書をめぐつての確執を説明するとすればおそらく、こうした世界のとらえかたの異なりをはらんだものではなかったか。そして開館後はおおむね山室の意図に沿つて、図書の蒐集・翻訳活動・日語講座・展観など文化諸活動がすすめられていったのであつた。以下、蒐集図書を図書目録などを中心にみていきたいとおもう。

北京近代科学図書館の図書目録としては『北京近代科学図書館書目一―一二』（一九三六―三八年）がある。各巻にはそれぞれ書名がありその第一巻は『近代科学図書館第一回運到目録』である。寄贈された図書にはさみこまれたメモには、「この目録は、正確に言えば第一回選定書目であつてこの目録に含まれながら実際には未だ到着していないものもある」「目録作成をいそいだので……品切れ・絶版があつて急の購入は間に合わぬものもあつた」とある。図書目録の常識からいうと考えられないところだが、こんなところにも問題意識の先行した図書館、満身にイデオロギーを帯びた図書館の性格がみてとれようか。この第一回運到目録は図書・雑誌とも科学・医学・農業・工業・産業関係の日本語図書で、たとえば物理学である『高等物理学提要』『高等家事物理学』『実用物理学』と続く。これは当初の外務省の蒐集方針に沿っている。

第二回運到図書目録はその大半を人文・社会科学関係が占めている。この目録にも、正式な目録たり得ぬとの言い訳が書かれ、また歴史科学と精神科学とはともに密接な関係がありその区分には問題がないわけではないと、日本図書館の特殊な性格についてその分類との齟齬を表明している。蒐集は事典・年鑑などの参考図書、そして精神科学は井上哲次郎『日本精神の本質』、和辻哲郎『日本精神史研究』、寛克彦『神ながらの道』ほか西田幾多郎、平泉澄、三木清らの著作がならんでいる。歴史科学では浜田青陵『東亜文明の黎

明』、黒板勝美『国史の研究』、津田左右吉『神代史の研究』などであるがそれぞれ一二〇、九〇点ずつ程で点数はそんなに多くはない。文学は岩波文庫により日本文学を概観し、美術・諸芸も概説書約三〇点で、まだまだ緒に就いたばかりである。とはいえこの時代、アジア・中国に対して表出されるものとして日本精神、日本哲学、東洋学、中国学、日本思想などある典型をのぞかせているとはいえず。そしてこれら蔵書はその後開催される展覧会や講座など図書館諸活動に加速されるかたちで充実していく。

第三巻から五巻までは人文科学や医・工・農学関係の「叢書論文集細目」である。第六巻は中文図書目録でその蒐集はまず年鑑・辞書等の基本図書、次に各分野の中訳日文図書（これは後述）、中国各機関寄贈の図書・雑誌などを集めている。所載の図書は商務印書館のものが多く中華書局、開明書店のものも目に付く。第七巻は“*Catalogue of Books Written in European Languages*”（一九三六）で、欧文図書目録であるが主として日本で刊行された日本についてのガイドブックおよびいくつかの欧文の学術雑誌ばかりで特に見るべきものはない。なお、三七年刊行の『北京近代科学図書館館刊』（創刊号）から「欧文日本研究書誌」が連載されたが、そこには欧文の日本関係図書が数多く採録され、\*印のついた所蔵書をみてもかなりの点数にのぼり充実をみせている。これは開館当初から欧文のものも含めて日本研究図書を蒐集しようという意志の表われであ

ろう。

第八巻は「寄贈日文书籍目録」、九巻は日文・中文ごとの購入図書・寄贈図書・寄贈雑誌の「新着図書目録」であり、第一〇巻は「*Catalogue of Scientific Essays Journals and Reports of Universities and Institutions in China and Japan*」一一、一二巻は「新着図書目録」であった。これら草創期の資料集積から以後の蔵書構築や活動の基本線がうかがえよう。

**展覧会** 展覧会は全部で八回一二件開催された。三九年には「日本美術図書資料展覧会」とあわせて「中国人日本研究図書展覧会」が開催され、中国人による日本研究図書、「日文原著中文翻訳書」(後述)、「中国人著・日本語学書」あわせて八四三点が展覧された。さきにみた図書目録所載の資料と比較してこの日本研究図書群は、日本図書館として質量ともに格段の充実をみせている。このうち中国人による日本研究図書については、明治期の何如璋、黃遵憲ら清代外交官のもの、明治維新を範とした編訳もの、維新以後日本の政治体制についてのもの、日清戦争以降急激に増えた中国人留学生のいわゆる東游记など小規模ながらも中国の日本関連の図書をよくあつめている。この展示図書は『日本美術図書資料展覧会目録附中国人日本研究図書展覧』として刊行されている。

ほかに展覧会は「日本美術図書図録展覧会」「日本医学図書雑誌展覧会」(一九四〇年)、「日本絵巻物展覧会」(一九四二年)などあ

るが、時局がすすむにつれ「翼賛図書展覧会」(一九四一年)、「大東亜関係図書資料展覧会」(一九四二年)などプロパガンダの性格をつよめたものも開催されている。ともあれ、開館時、図書蒐集・蔵書構成をめぐる確執もここにきて、科学・技術・医学・産業の科学図書、日本紹介については美術・写真・絵巻物・愛国文学等の日本紹介図書、欧文・中文含めての日本研究図書という形でようやく確立されてきた感がある。

**日語講座・教科書** 図書館での日本語講座は三七年九月開始の北京放送日本語講座を聴講するかたちで、閲覧室とテキストを用意してはじまった。「二つの新しき言葉を知るは一つの新しき世界を知るなり」との思想で、図書館に所蔵する日本語図書の読書のためにはじめられた日語講座は、以後基礎講座・補充講座・師範科・日語研究会・日本音楽講座と各種もたれることになったが、ここではそのために編纂された教科書についてみておきたい。

まず三七年一〇月刊行された『初級日文模範教科書』は第六巻まで刊行され、第一巻は三年程の間に刷を重ねて二万九四〇〇部と各界各学校で広く利用された。一二月には『日語補充読本』全六巻が刊行されている。先の『初級日文模範教科書』修了者のための日本語・日本文学鑑賞用テキストであるこの『日語補充読本』がどのような作品をえらんで教科書を編んでいるか興味をひかれるところだが、それを第六巻からひろってみる。北原白秋「独神」、菊池寛

「極楽」、菊池大麓「幾何学の説明」、島崎藤村「障子」、荻原井泉水「知命之書」、松本亦太郎「渡り鳥」、「松葉仙人」(『十訓抄』)、森鷗外「高瀬舟」、徳富蘆花「自然と人生」のほか、斎藤茂吉、吉村冬彦、本居宣長、永井潜、中島広足、横井也有、俳句、志賀直哉、四書(漢文訓点)、島木赤彦、和歌、良寛、随筆(『土佐日記』『枕草子』ほか)、谷崎潤一郎、芭蕉『奥の細道』、「遊びをせむとや」(『梁塵秘抄』)ときて、最後はやはり「八俣遠呂智」(『古事記』)でしめている。古典から当時の現代文学、エッセイまで幅広い選定で、たとえば現在の日本語学校で採用されている日本語教科書と比べてもさして選定に意図は感じられない。

三八年二月には『高級日文模範教科書』全三巻が編纂された。初級が談話体であるに比してこれは文章体で、上級への過渡的な教科書であった。内容は島崎藤村「千曲川旅情の歌」、谷崎潤一郎「麒麟」、「徒然草」、「枕草子」の一節などである。これら日文教科書の選定作品はいずれも日本の古典、近代文学の類で、選者としても日本文学・文化の紹介を通じて(善意の)日語学習を意図していたのであろうが、別の見方をすると、こうした日本の文学や古典をアブリオリに紹介すること自体でこの時代の「日本」が表出しようとの、ある種の自信を日本は中国に対してもっていたといえるかもしれない。このことは同じ時期ニューヨークに開館した日本図書館であるニューヨーク日本文化会館図書館での書物を通じての表出と比較す

るとその眼差しの差異は明らかである。<sup>(10)</sup>

一〇月には、これは中文であるが『中国現代文読本』が錢稻孫・尤炳圻・洪炎秋らの手で編まれた。日中の「両国青年が心から語りあうに」足る中国の現代文をあつめたもので二〇編からなる。朱自清、鄭振鐸、周作人、郁達夫、魯迅、林語堂、沈從文らで、こうした顔ぶれをみた限りでは、当時の留平組(北京残留組)であった錢稻孫の脳裏には西遷組とのイデオロギー的な区別意識はなかったように感じられる。

さて、この図書館の利用は圧倒的に中国人の方が多く、閲覧図書も文学・語学関係が主力であった。そのことを『書滲』編集子は、本館日語学校の生徒が利用しているもので当地の日本語研究熱の高さによるもの、と記している。<sup>(11)</sup> こうした環境のなか一九三八年には師範科の入学式とあわせて高級班第一期生の卒業式がおこなわれた。その式次第をみてみるとまず、正面に掲げられた日中両国の国旗に敬礼、山室館長の祝辞、菊池租司書の経過報告、卒業証書授与と続き張我軍(錢稻孫欠席のため)の講師訓示、大使館参事(代理)や湯爾和教育部総長(代理)、大岡保三文部省圖書監修官、羽仁もと子北京生活学校長らの祝辞、卒業生答辞、入学生答辞というものであった。

ちなみに一九三九年に師範科を卒業した一八名の学生の就職先をみてみると、図書館員の現職のまま講習を受けたもの二名、日語教

員として扶輪小学校へ四名、淑徳小学校へ一名、憲兵教習隊、印刷局へ各一名、満鉄へ三名、新民会関係へ二名、残る四名も近々決まる予定という。<sup>12)</sup>みてのとおり日本関係機関が多かったが、就職口も保証されたひとつの学校でもあったといえよう。そういう意味ではこの、大日本帝国外務省の主宰する北京近代科学図書館の日語講座は、日本語資料にかこまれた植民地図書館へ日本へへの、ささやかではあるが、もうひとつの日本留学”といってもよいものであった。

例えば、三八年一二月に赴任した佐藤三郎は受け持ちの師範科と高級班の生徒に、日本に対する気持ち、日本語に対する感をきいているが、ある受講生は「日本のことを考えると自分は慚愧の念に堪えない、日本は明治維新後六〇年足らずで世界の強国の仲間入りを果たし、世界の強国も軽視できぬほど工業・商業など長足の進歩を遂げた。まさに驚くばかりだ」(原文中国語)といい、またある学生は「我々は日本がどうしてこのように発展し、中国がなぜそのようになれなかったのか参考にし研究する。当初は日本も現在の中国と変わりがなかった。だが日本は維新以降日増しに勢い盛んになり、中国は日本のようにはなれなかった。わたしの日本にたいする感想、それは努力!につきる」(原文中国語)といい、また「我々が日本語を学ぶ最大の目的は日本文化を理解しようとする事である」「日本の武士道精神は正義を前にしてなにものをも恐れず国家のためには死をも恐れぬ。日本人の日本陸軍の強い理由はこの点(忠君崇祖

孝養といった日本の道德)にある」(女性・一七歳・原文中国語)等々書き記している。これら日本語講座の受講生の、たとえば中国と日本の近代化をめぐる問題意識などは、日清戦争以降に急増した日本への留学生の留学への動機とあい通じるものがあるし、また昭和一五年に国際文化振興会の主催でなされた皇紀二千六百年奉祝記念事業国際的記念論文集募集<sup>14)</sup>への応募者や入賞した中国人(その幾人かは日本への留学経験者である)の意識ともかさなっている。

更にまたかれらの受講申込み書の「日語研究之目的」に記された動機をみると、「日本文化の研究」「中日文化の交流」「日本留学」が多数をしめていたといい、この図書館の日語学校は、日本図書館という小さくしつらえられた世界ではあったが、かれらにとっては「もうひとつの留学」であり、かれらはこのようにして「日本」へと留学し「日本」を学んでいた、といった気がする。

翻訳・出版 図書館の出版物には三七年九月に紀要として刊行された「館刊」(六号まで)、日本人の論文を中国訳した『叢刊』二八冊や図書館の月報である『書滲』などがある。

まず「館刊」であるが、これは北京においての「文化運動恢復の魁け」たらんとし創刊された学術誌で、日本文化の紹介のため主として日本語学術論文を中国訳して掲載した。創刊号には銭稻孫「日本古歌詮訳二則」、永井潜「日本精神与近代科学」、橋川時雄「京山李維棹伝考」、塩田良平「日本文学史書解題」などが載った。



そのほか島崎藤村、西田幾多郎、和辻哲郎、北原白秋、谷川徹三、家永三郎、長谷川如是閑らの論文が順次翻訳され紹介された。

また館刊の記事のなかでこの図書館の性格をよく言い表わしている記事として、連載の「欧文日本研究書誌」がある。これは、欧文の日本関係文献目録で、海外の日本研究図書館がまず蒐集しようとする資料である。この編者はその前文で、執筆は毎晩一時から三時までであった。手もとに現物がなく、昼は多忙で北京図書館や他の学校に文献の所在がわかっていても調査にもいけぬ、とその苦勞の程を語っている。所蔵目録ではなく文献目録で、館所蔵の図書には\*印が付されている。所蔵目録ではなく文献目録を編集するところなど、『近代科学図書館第一回運到目録』の場合と同じく、あるべき理念を先験的に打ち立てて積極的活動を展開しようとしたこの日本図書館の、いつてみれば面目躍如といったところか。

二号には「漢訳日本芸文類書目」として日本の古典等の中国訳の書目が掲載された。周作人訳『狂言十番』や郭沫若訳『草枕』などであるが、その前文には「此度ノハ専ラ日本ノ方々ニ見テイタダコウト思ッテ編シタ、ドンナモノガ訳サレ、ドンナモノガ興味ヲモタレテイルカラ知ルヒトツノ材料ニモノアウト思ウ」と記されている。こうしたところからもうかがえるように、この北京近代科学図書館の活動は、植民地中国に対してだけでなく、内地日本にたいしても常に意識的にアピールされていた。そして日本図書館としての理念

は日々、機関誌の記事や蒐集図書、諸活動などに埋め込まれ続けたのであった。

『書滲』は月刊の館報で、受贈図書・雑誌の目録や日語講座など図書館業務の報告や利用統計、本館日記抄、中国の図書館事業の記事のほか中国人講座生の短文や卒業生の手紙などの記事が掲載された。なかでもとりわけ興味をひかれるのは、主として錢稻孫によりほぼ毎号対訳のかたちで紹介された日本の文学作品の中国語訳である。<sup>(15)</sup> 錢稻孫のこうした活動は北京近代科学図書館のある象徴をなしていた。以下そのことについて述べてこの項のむすびとしたい。

まず錢稻孫について簡単に紹介する。<sup>(16)</sup> 錢稻孫は一八八七年浙江興の生れ、父錢恂は天一閣藏書整理の命を受け『天一閣見存書目』を編成したという文人で、錢恂が明治末に清国公使館の参事官として来日した折に伴われて渡日、慶応義塾幼稚舎で小学校、高師の附属から高等師範学校を終え、さらにローマ大学を卒業した。二五年頃より北京大学、清華大学で日本語学、日本文学の講師として出講、国立北平図書館でも興図部主任をつとめた。三一年清華大学教授・図書館長兼任となり、日中戦争勃発後も北京に残り北京大学本部秘書長、北京師範学院図書館主任、文科主任教授などを歴任、周作人と臨時政府に協力、よって戦後周作人とともに漢奸として裁判にかけられ懲役一〇年公民権剝奪六年の判決を受けた。

かれは北京に居残ったいわゆる留平教授で、北京近代科学図書館



においても、館報に執筆のほか日本語基礎講座の講師としてその活動に積極的に協力した。これら館報『書滲』<sup>17</sup>に翻訳（対訳）連載された日本の文学作品は四一年錢稻孫『日本詩歌選』として刊行された。それには周作人が跋文を寄せ、山室が序を書いている。山室の序によると当初作品は図書館側が選んで依頼していたが、のちは錢稻孫自らがさがして訳したとのことである。

周作人はその跋文のなかで「思うに我々は文芸において異中に同を求め、異時代異種族の文化の中に共通の人間性を尋ねる。それこそ有意義の意味であるといえる。……日本と中国はもともと同種でもなければ同文でもない。ただ、地理的歴史的関係によって文化の交流があり東亜の共通性を有しており、とりわけ文芸方面は中国人にも容易に了解し摂取することができる。もしそこに壁があるとすれば言語上の問題であり、それも達人がいさえすればそのことも達成しうる。錢稻孫先生のこの選は謹厳なる中国語で日本人の情感に達しており、これを読むに中国の古詩を誦じているかのようである」と賞賛している。『日本詩歌選』に収録の作品はたとえば「馬問答」など『万葉集』、『日本古謡訳抄』（『梁塵秘抄』より）、「良寛和尚歌選訳」、さらに蕪村や芭蕉、加賀千代、正岡子規らの俳句や島崎藤村「雲のゆくえ」、宮沢賢治「北国農謡」など現代詩や日本の古典、当代文学までにおよんでいる。錢稻孫の幅広い教養と学識がうかがわれよう。

また北京近代科学図書館に関わりのある錢稻孫の出版物として、またこの図書館の性格をよく言い表わしているものとして『桜花国歌話』<sup>18</sup>がある。これは佐佐木信綱・斎藤茂吉ら文学報国会によって選ばれた「愛国百人一首」を錢稻孫が翻訳したもので民国三二年（一九四三年）に刊行されている。小序は周作人の筆で「私は若いころから西洋近世文学評論を涉猟してきた。いわゆる政治文学については、永遠性がなく雷同しやすく真実を欠いているとの理由で好むところではない。それは我国の著作にたいしてもそうである。私は頑固な性格なので今に至るまでこの政治文学についての考えを変えろことはなかった。ただ日本についてはそうではない。日本は特殊な点をもっていて他民族等と同等に論ずることはできない。この愛国詩もそのひとつである。日本の国体は特殊であり云々」と述べている。政治文学を否定しながらも日本のこの「愛国百人一首」を日本の国体の特殊性ゆえ肯定するなど、周作人の混乱ぶりをみるのはせつなく無残である。

さて、図書館では時期を同じくして同年三月、「愛国百人一首作者文献展覧会」と銘打って展覧会を開催した。その第一部は作者別文献で柿本人麻呂から大隈言道までの百人の和歌を掲げ、そこに中国人の理解をたすけるため錢稻孫の中国訳をおき作者の関係文献を展示した。第二部は作者関連の文献で、たとえば精神篇では作者と日本精神・日本思想・国体・神道・国学などとの関係を示すという

かたちで一〇〇冊の文献をもって展覧された。『書滲』の編集子は、「此種の展覧会の催しは日本内地に於ても未だ展覧されたことを聞かない時、また愈々真に重大な非常時に……北京に於て開催することの意義を深く感ずる次第である<sup>19</sup>」とその意義を強調しているが、確かにこれは植民地中国での「日本」図書館の活動の、ある集約点を指し示していたと思う。

この銭稻孫は北京近代科学図書館を体現していた。かれは『書滲』誌面にあらわれた翻訳や出版だけでなく日語講座の主要な講師でもあった。かれは根底でこの北京での日本図書館を支えていたのだと思う。高名な学者で知日家・親日家であったかれを図書館が利用したのだともいえるが、逆に銭は北京近代科学図書館という文化的活動の舞台を得て日本研究をし日本紹介をしたとの感もある。ともあれ図書館は格好の人物を得て活動を展開できたわけだ。

このように北京近代科学図書館は植民地中国での日本図書館としてその時代の「役割」を確かに果たしたと思う。そしてその一翼を銭稻孫の「親日」「知日」が担っていたという事実は銘記されてよい。知日家としての「善意」の関わりや日本研究への熱意——もちろんそれには時代を見通す力が欠けていたわけだが——がこの北京の戦前期日本図書館の事業を「豊か」なものとした。やがて図書館は戦況にあわせて解体、その知日家は漢奸として裁かれることになる。銭稻孫はこの北京近代科学図書館の歴史を生き、また中国人と

してその歴史の悲劇を体現したのであった。

### 三 翻訳された「日本」の蒐集

ここまで北京近代科学図書館についてその設立の経緯と活動を概観してきた。その活動はといえば模索と試行錯誤の連続で、手づくりのきめ細かい文化活動であったといえる。いわば柔らかな文化侵略、文化侵略のソフト作りで、その分この図書館の活動は民衆に密着したものであった。そしてこの北京近代科学図書館の中国にたいする眼差しの根底には、中国に対する、また間接的には欧米に対する感情の揺れ、つまり日本の近代化・西欧化過程におけるアイデンティティの模索やその確立の問題が見え隠れしているようにおもわれる。言葉を変えて言えば日本の、中国に対するアンビバレンツな感情とでもいうべきものであろうか。

古代より日本は中国・朝鮮の文化のなかで育ってきた。それが明治維新になり日本は急速に西欧文化を取り入れ、それを我が国政治・経済・教育等の基礎にして近代化をおしすすめてきた。それが明治中期の国粹保存を経て日清（一八九四—一九〇五年）・日露（一九〇四—一九〇五年）の両戦争に勝利することにより一層そのアイデンティティが問われるかたちとなった。中国からの自立とあわせてさらに、西欧からの離陸が要請されたというわけである。

ところで、この時代のひとびとは、日本人の心の奥底に見通しの

表1 日訳中文書統計表 (分類は日本十進分類法)

| 年<br>代<br>書<br>数<br>類別 | 0<br>総記 | 1<br>哲 学 | 2<br>歴 史 | 3<br>社 会<br>科 学 | 4<br>自 然<br>科 学 | 5<br>工 学<br>技 術 | 6<br>産 業 | 7<br>芸 術 | 8<br>語 学 | 9<br>文 学 | 合 計    | 毎年平<br>均書数 |
|------------------------|---------|----------|----------|-----------------|-----------------|-----------------|----------|----------|----------|----------|--------|------------|
| 1660-1867              | 2       | 0        | 14       | 3               | 0               | 0               | 0        | 0        | 2        | 88       | 109    | 0          |
| 1868-1895              | 0       | 1        | 5        | 5               | 2               | 0               | 1        | 0        | 4        | 2        | 20     | 0.74       |
| 1896-1911              | 1       | 2        | 2        | 3               | 0               | 0               | 2        | 0        | 0        | 6        | 16     | 1.06       |
| 1912-1937              | 3       | 397      | 56       | 163             | 1               | 6               | 25       | 4        | 5        | 142      | 802    | 32.08      |
| 1938-1945              | 21      | 15       | 61       | 203             | 12              | 60              | 111      | 8        | 9        | 108      | 608    | 86.85      |
| 1946-1978              | 8       | 154      | 177      | 627             | 40              | 17              | 61       | 45       | 11       | 640      | 1,780  | 55.62      |
| 合 計                    | 35      | 569      | 315      | 1,004           | 55              | 83              | 200      | 57       | 31       | 986      | 3,335  | *          |
| 割 合 %                  | 1.05    | 17.06    | 9.45     | 30.10           | 1.65            | 2.49            | 6.00     | 1.71     | 0.93     | 29.56    | 100.00 |            |

表2 中訳日文書統計表 (分類は中国図書分類法)

| 年<br>代<br>書<br>数<br>類別 | 0<br>総類 | 1<br>哲 学 | 2<br>宗 教 | 3<br>自 然<br>科 学 | 4<br>応 用<br>科 学 | 5<br>社 会<br>科 学 | 6<br>中 国<br>史 地 | 7<br>世 界<br>史 地 | 8<br>語 文 | 9<br>美 術 | 合 計    | 毎年平<br>均書数 |
|------------------------|---------|----------|----------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------|----------|--------|------------|
| 1660-1867              | 0       | 0        | 0        | 0               | 2               | 0               | 0               | 0               | 2        | 0        | 4      | 0          |
| 1868-1895              | 1       | 0        | 1        | 0               | 2               | 1               | 0               | 2               | 1        | 0        | 8      | 0.29       |
| 1896-1911              | 8       | 32       | 6        | 83              | 89              | 366             | 63              | 175             | 133      | 3        | 958    | 63.86      |
| 1912-1937              | 20      | 62       | 19       | 249             | 243             | 660             | 86              | 75              | 312      | 33       | 1,759  | 70.36      |
| 1938-1945              | 2       | 3        | 1        | 23              | 18              | 42              | 8               | 9               | 32       | 2        | 140    | 20.00      |
| 1946-1978              | 34      | 159      | 95       | 227             | 1,051           | 459             | 51              | 122             | 535      | 163      | 2,896  | 90.50      |
| 合 計                    | 65      | 256      | 122      | 582             | 1,405           | 1,528           | 208             | 383             | 1,015    | 201      | 5,765  | *          |
| 割 合 %                  | 1.13    | 4.44     | 2.12     | 10.09           | 24.37           | 26.50           | 3.61            | 6.64            | 17.61    | 3.49     | 100.00 |            |

きかぬ無意識の暗部とでもいうべきものを抱え、その暗部をくぐり抜けてこそ真に自分自身になりうると考えていた、と私は思っている。その暗部が、古代より脈々と続いてきた中国からの文化移入の集積に根ざしているのかどうかはつまびらかではない。

(大変迷惑なことではあったが) その実験の場が日露戦争以降の満州であり中国であった。そのことを書物の集積の場としての図書館の文脈でいうと、満鉄図書館などの〈満州〉の図書館や北京近代科学図書館などの〈中国〉での日本図書館は、大仰にいつてしまえば民族のアイデンティティ確立というその一面を、書物という相で表出したといえるのではないか。書物の蒐集と集積という、ある主体的な意志をもって指し示したといっているのではないか。そして最後発であった北京近代科学図書館の活動はその過程のなかで、崩壊の時期に突出して咲いた徒花であったのではないか。

それはたとえば、満鉄図書館の場合、社業に関わる資料蒐集・調査という本来の活動に加えて、奉天図書館長衛藤利夫の、異郷中国での、宣教師・伝道者など欧米人の著作になる満州・蒙古・中国関係の資料蒐集や、同じく大連図書館の “*Classified Catalogue of Books in European Languages in Dairen Library of the South Manchuria Railway Company, Far East*” に結実した蒐集活動<sup>20</sup>、幾度か満鉄図書館報『書香』に掲載された中国人の日本研究などで、それらもこうした文脈で読まれるべきであろう。そして更に、本稿

の北京近代科学図書館の精力的な文化活動も、図書館という器をつうじての〈日本〉の顕現であったといえる。だが、中国大陸への侵略のなかで試みられた中国および西欧からの自立とアイデンティティの模索、〈日本〉の現出も失敗に終わった。とりわけその出自である中国という不均質な他者を同一化しようとしたという点において決定的に失敗したのであった。

以下、この時代、北京近代科学図書館に集積された書物にみられる〈日本〉の一断面を、日本と中国間の翻訳の歴史を通してみていきたい。蒐集のひとつの核とされた中訳日文書を中心に日中の書物の翻訳の歴史を、日中文化交流にとっての第三者である欧米文化を媒介にいて考えてみたいと思う。

日中・中日間の翻訳の歴史については譚汝謙の詳細な研究<sup>21</sup>があるのでそれを援用する。まず一六六〇年から一九七八年までの日訳中文書と中訳日文書の統計をあげる(表1・表2)。そして各期間の合計数の両者を比較したものをつぎに掲げる(表3)。

(表3) から明らかにみてとれるように日清戦争以前と以後では日中の翻訳の形勢は逆転する。つまり日清戦争以前には、日文書の中訳は一二点しかないのに比べて中文書の日訳は一二九点もある。ところが日清戦争で中国(清国)が日本に敗れ、以降辛亥革命までの間に中文書の日訳は一気に一六千点まで減少した。逆に日文書の中訳は九五八点にものぼっている。このことは、江戸時代や明治維新直

表3 中訳日文書、日訳中文書比較表

| 年<br>代    | 種別<br>点割合 | 中訳日文書 |       | 日訳中文書 |       |
|-----------|-----------|-------|-------|-------|-------|
|           |           | 冊     | %     | 冊     | %     |
| 1660-1867 |           | 4     | 0.2   | 109   | 3.9   |
| 1868-1895 |           | 8     |       | 20    |       |
| 1896-1911 |           | 958   | 16.7  | 16    | 0.5   |
| 1912-1937 |           | 1759  | 30.5  | 802   | 24.0  |
| 1938-1945 |           | 140   | 2.4   | 608   | 18.2  |
| 1946-1978 |           | 2896  | 50.2  | 1780  | 53.4  |
| 計         |           | 5765  | 100.0 | 3335  | 100.0 |

後には、日本が中国の図書を翻訳し学んでいたのだが日清戦争以後は反対に中国が日本から政治や文化を摂取しようとした、ということの意味している。これは明らかに日清戦争による衝撃、逆転の現象である。そのあたりの事情を譚汝謙によりながら、具体的に翻訳図書をあげつつみていく。

まず明治維新から日清戦争までの時期の翻訳である。この時期の中訳日文書は一二点であったがそのうちの九点は日本人による訳である。たとえば花房柳条著、藤田豊八訳『蜜蜂飼養法』（一八九三年）などである。また、ちなみに日訳中文書は、江戸時代の『水滸伝』『三国志演義』など中国古典小説の訳が主で、ほかにはマテオリッチ『坤輿万国全図』（一八〇二年）、フェルビースト『坤輿外紀』（二八五二年）、橋本左内や吉田松陰らも読んだという魏源『海国図志』（一八五五年）、ウエイの『地球説略』（一八七四年）、レッジ『智環啓蒙塾課目』（一八七二年）など一二九点である。こうした翻訳以外にも、西洋図書の漢訳本の輸入やその翻刻、訓点を付けて利用したものなどを含めると、この時期の日本は「漢訳西洋文化を橋梁とし」中国や西洋を吸収しようと努めたといえる。つまりこれは日本にとって、蘭書などの直接的な西洋の見聞とはまた別の、中国を通じての西洋を見る小さな窓であったわけだ。

次に日清戦争後（一八九六年）から辛亥革命（一九一一年）までの間をみてみる。日清戦争で日本に敗れた清国は、明治維新にならって唱えた憲法制定や学制改革などのいわゆる変法自強の必要にせまられ、新式の学校や出版社・図書館・新聞社などの設立を計画した。なかでも力がいれられたのは留日学生と日本語図書の翻訳であった。日清戦争以降日本への留学生の数は激増し、かれらの帰国により日本語図書の翻訳活動がますます盛んになっていったわけである。そ

して一九〇一年に梁啓超は「以東文為主、而輔以西文；以政學為先、而次於<sup>(23)</sup>芸學」との方針をしめし、日文の翻訳のうち政治学が第一で西洋のものでそれを補うとの方向で、日文書の中訳が振興された。

たとえば、訳書彙編社（一九〇〇年）、湖南編訳社（一九〇二年）などが創設され、盛んに日本語図書の翻訳活動を展開したが、その社員の間が留日経験者であった。<sup>(24)</sup>さらに、主として日本語学を教授する東文学堂、日文学堂（一八九八年創設）などの学校も創設され中訳日文書熱もますます高まっていく。また、こうした学校もふくめ日本から中国各地に数多く招聘された教習（お雇い日本人）によっても翻訳がなされた。たとえば藤田豊八訳『物理学』、鈴木虎雄訳『経済学要義』などの社会科学・自然科学の教科書類であった。また金港堂との合資で一八九七年に設立された商務印書館などの日本人出資の出版社も翻訳に貢献している。このように日本語図書の中国訳への翻訳活動が盛んになったのは、日本語は中国語と類似し翻訳が比較的容易であるとされたこと、そして、日本・中国の立場がともに欧米列強の東漸に迫られて近代化の道を強いられるという国情にも似た点があったこと、それが日清・日露両戦争に日本が勝利して日本がいわゆる一等国となったこと、などの理由による。そしてこれらの翻訳図書は、先にも述べたように北京近代科学図書館の運到目録のなかに数多くみられたものである。

さて、この時期の翻訳の特色をあげればまず、中小学堂の教科書

に供されるもの、啓蒙的なものが多くみられたということである。

上海文明書局や商務印書館の刊行物などそうであった。また社会科学・哲学関係の訳書も目につく。たとえば鈴木光太郎『東洋女権萌芽小史』、井上円了『妖怪学講義総論』、岸本能武太『社会学』などの訳書である。これら社会科学関係のものが多く訳された背景は先にも少しのべたように、日本が西洋の政治制度や社会体制を消化し取り入れて咀嚼し、考察をかさねた結果としての日本人の著作が中国社会の需要を呼んだことによる。事実中国では、外国語図書といえば明末以降は英文を中心とする西洋書を意味していたが、日清戦争の後には外国語図書として中訳日文書が中国翻訳事業の中心をしめるに至った。ちなみに一九〇二年—一九〇四年の翻訳は英文から八九点（一六・六％）、独文二四点（四・五％）、仏文一七点（三・二％）であったが、日文からの翻訳は三二一点（六〇・二％）を占めていた（表5）。

次に辛亥革命の翌一九一二年から一九三七年日中戦争開始までの時期についてみてみる。基本的には前の時期の傾向が続いており、社会科学関係のものがトップで、ついで語文類、自然科学、応用科学と続く。社会科学のなものについては、清王朝崩壊後の社会体制を模索するもので、日本の立憲君主制はもはや見習うべき対象ではなく、教育制度も欧米のものが注目された。また辛亥革命や五・四新文化運動を経験し、欧米の自由主義・唯物論思想など受け入れる



表4 中国訳書状況 (1850-1899年)

| 国別<br>点数<br>割合 | イギリス | アメリカ | フランス | ドイツ | ロシア | 日 本  | その他  | 合 計   |
|----------------|------|------|------|-----|-----|------|------|-------|
| 点数(冊)          | 286  | 82   | 13   | 29  | 2   | 86   | 69   | 567   |
| 割合(%)          | 50.5 | 14.5 | 2.3  | 5.1 | 0.3 | 15.1 | 12.2 | 100.0 |

表5 中国訳書状況 (1902-1904年)

| 国別<br>点数<br>割合 | イギリス | アメリカ | フランス | ドイツ | ロシア | 日 本  | その他  | 合 計   |
|----------------|------|------|------|-----|-----|------|------|-------|
| 点数(冊)          | 57   | 32   | 17   | 24  | 4   | 321  | 78   | 533   |
| 割合(%)          | 10.7 | 6.1  | 3.2  | 4.5 | 0.7 | 60.2 | 14.6 | 100.0 |

表4、表5とも黄福慶『清末留日学生』より作成

素地ができて、学術的専門的なもの、理論性のものが目立ってくる。たとえば、欧米思想を摂取し近代化の道をあゆんできた日本の現実やその社会的矛盾を学ぶべく社会主義・マルクス主義的なものが翻

訳される。高島素之、山川均、堺利彦、河上肇、平林初之輔らのものである。また反対に、『社会主義批判』、『共産主義批評』といった資本主義経済制度を主張するものもみえる。

また欧米とソ連との間の日本の行き方Ⅱ「第三世界観」を模索した書物の訳書も登場する。たとえば『日本之新農村』の「日本のデンマークの碧海郡」のようなものである。つまり日本は、もはや中国にとって、西洋の知識や技術を吸収するための単なる橋渡し役ではなく、さらにまた、西洋の学問も唯一の「求学之正路」ではなく、日本の「行き方」のひとつの例示として日本のデンマーク（安城）などが訳されるのである。これはこの時期中国が欧米ともソビエトともことなる「第三世界観」を日本を透かして見ようとはじめてたことを意味する、と譚汝謙は説明している。

文学関係についても、日本のいわゆる西洋翻訳文学からの中訳の数が随分減ってきている。これも中国人の西文能力が向上し、日本語図書が西洋への橋渡しとしてさほど必要ではなくなったという理由によるものである。そして訳者も魯迅・周作人・田漢・郭沫若・張我軍・錢稻孫ら著名人が登場してきた。

さらにこの時期自然科学および応用科学図書の翻訳の伸びもみのがせない。両者合わせて四九二点で、社会科学関係訳書に及ばんとしている。年平均の出版点数はまえの時期の二倍近くにのぼっている。なかには入門書も少なからずあるが、専門的なものも数多く訳

業の水準も高い。訳者は科学技術分野の専門家である周建人・鄭貞文<sup>26</sup>・丁福保<sup>27</sup>らが従事し、また他の分野で一定の地位を得ている張資平・湯爾和らも科学技術関係図書の翻訳を手がけ、その水準をあげた。これらの図書は戦後になっても引き続き中国や台湾で版を重ねて出版されたほどであるという。

さて、以上の簡単な中訳日文書の歴史を前提にして北京近代科学図書館との関連にもどる。該館の設立は一九三六年で、日本語図書および前述の時期に出版された中訳日文書を蒐集したわけである。

このことを中国側の需要という面からいえば、日本（語図書）を通して西欧を学習し、日本に摂取され消化された西欧を見、日本語図書を通して西欧化した日本を窺おうとしていたのである。そして西洋近代科学や技術・政治経済・文化を含めてその時代の日本の現実が（社会的矛盾のあらわれである社会主義思想などもあわせて）近代のある到達点であると考えれば、中国はそうした「日本」を摂取しようとしていたのである。日中の翻訳史とりわけ中訳日文書の歴史はその集約点であった。

北京近代科学図書館の中訳日文書の蒐集は、こうした翻訳の歴史にささえられ、こうした中国側の需要を背景に持ち、そして植民地中国での日本語図書の蒐集というかたちをとった「日本」の表出、日本図書館の意志であったというわけだ。

一九三九年一二月に開催された中国人日本研究図書展覧会の目録<sup>28</sup>

には、留日学生の東游记など「中国人日本研究図書」「日文原著中文翻訳書」「中国人著・日本語学書」が載っているが、この「翻訳書」の中身を少しみてみたい。ここには四九二冊の日文原著中文翻訳書があげられている。もちろんこれがすべての蔵書ではないが、展観に出すという以上、集蔵書の典型と図書館がみなしているというところであろう。まずその内訳をみてみる。社会科学、自然科学が多く、あと文学、医学、産業と続く。この蒐集は先にみた翻訳の状況とまずまず符合しているようか。

哲学・思想関係は翻訳書ではカントなど西洋哲学史の桑木厳翼の著作が三点、ほか金子筑水のもの二点、朝永三十郎、津田左右吉、浮田和民などである。歴史部門は利用を考えてか中国や朝鮮、蒙古、西域関係のものがみえる。社会科学は、政治・法律・経済・教育・社会学など万遍なくあげ、とりわけ欧米やソ連、米国、日本の基本的なものを拾っているといえる。たとえば小泉信三『近世社会思想史綱』、平林初之輔『近世社会思想史要』、ほか波多野鼎『社会思想史概論』、丘浅次郎『煩惱と自由』、五来欣造『儒教政治哲学』、蠟山政道『政治学総論』、安部磯雄『経済学新論』、加田哲二『ドイツ社会経済史』、河田嗣郎『土地経済論』、石浜知行『アメリカ資本主義発達史』、高橋亀吉『日本資本主義発達史』、大内兵衛『财政学大綱』などである。自然科学関係の翻訳図書も一九三三年前後の出版のものを中心に幅広く集め、また医学関係の蒐集にも力をつくして

おり、近代科学図書館の面目を発揮している。

翻訳書はやはり商務印書館のものが圧倒的に多く、あと開明書店、同仁会のもが目に付く。また安部磯雄、平林初之輔など社会思想的なものも散見するが数は多くない。いずれにせよ政治・経済・法律などの教科書や中国関連の哲学や思想、文化論、欧米やソ連の教育制度や政治・社会学関係の図書、そして日本文学の翻訳、そしてかなりの量の自然科学・技術・産業関係の翻訳書などであったといえる。つまり先に述べてきた日中の翻訳事情に沿うかたちの中訳日文書の蒐集と、その利用を勘案した蔵書の構成であったといえよう。個々の図書の評価もさりながらこうした〈日本〉図書の群れⅡ図書群としてみれば、そのなかにこの時代の〈日本〉思想の中国に対する「自信」をみることもできようか。

さて、それではこうした北京近代科学図書館の資料蒐集や諸活動は内地からどのように見られていたのであろうか、それを昭和二十一年一月二六日東京倶楽部において開催された国際文化振興会主催の「対支文化工作に関する協議会」<sup>29</sup>により見てみたい。なお国際文化振興会とは国際的協調委員会および「対支文化事務局」を源流として昭和九年四月に設立された財団で、中国だけでなくアジアや欧米各国に対して広く文化事業をうけ持ち、当時の海外文化活動には必ずといっていいほどその名前が見え隠れしていた。そしてまたこの振興会は海外各地に駐在員を置いたが、そのうち北京は北京近

代科学図書館館長山室三良がその任にあたっていた。

その協議会であるが、当日の参加者は東方文化学院研究員阿部吉雄、外務省東亞局長石射猪太郎、文化事業部市河彦太郎、東京帝国大学文学部植田捷夫、江上波夫、海後宗臣、東方協会堀江邑一、東京朝日新聞社東亜問題調査会嘉治隆一、学習院大学教授白鳥清、著述家水野梅曉、同盟通信社横田実、内閣企画院中村正一および振興会側のメンバーであった。このなかで嘉治隆一は、日中戦争勃発で南開大学が破壊されたことを例に、このような文化機関がだめになるという事態は北京の文物が保存されたことと相殺するにあまりある非文化的なこと、と憂慮し、あわせて北京近代科学図書館については「あすこに集められている日本語の書物は支那人（以下原文ママ）にとつてはかなり高級な書物です。それが読めるような支那人は数に於いて非常に少い。随て余り利用されない。それから鑑みて通俗図書館を作つて、それにはここの振興会で日本の通俗書物を支那語に翻訳してそっちへ送る。それを支那の大衆に出来るだけ利用するよう宣伝する。更に通俗的にいえば児童文庫あるいはお伽噺といったようなものの支那訳―支那人に通俗的に読める支那語に翻訳する」と大衆的な書物の翻訳を励行している。さらに江上波夫は、お茶を飲みながら講談できる北京の茶社を例に、今北京にある通俗図書館に通俗図書を寄贈して利用してもらえばいい、とこれも通俗書の利用を説いている。また横田実は、図書館の建物は立派で日本

から図書も相当持っていたが新刊書はわずかで古い本ばかり、そして一向に関連性のない本ばかりが多いように思う、と批判している。そしてその図書館はいかにもはいりづらいし、ならばいっそ街のすみずみまで行ける巡回文庫のかたちで一般民衆に直接接触する民衆図書館、閲報所を作ればよい、と北京近代科学図書館に注文をつけている。

この協議会は、図書館が設立されてまだ一年あまりしかたっていない時点で開かれたもので、その後の図書館の諸活動の展開などをみての上での論議ではない。したがって全部が全部、的を射ているわけではない。しかしながら、設立当初に主として蒐集図書の形で表出させようとした新官僚による『近代科学図書』、山室の『日本図書』のそれぞれの「日本」が、国内のこの協議会においては「日本」という問題意識の内実からではなく、もっぱら利用という面からとりあげられ批判された形にはなっている。北京近代科学図書館の設立は外務省によるもので、国際文化振興会の意向が大きくとりあげられたというわけではないが、それでもこの設立の経過や目的などはこの協議会の参会者にとっては大略は承知のうえでのことであらう。日本語図書や論文、古典などの翻訳はのちに図書館の主要な活動としてくりひろげられており、またお伽噺や児童文庫についても分館に児童閲覧室を設けて利用者もふやしてきているわけだが、この協議会の開催時にはまだそこまでの活動はみえてなかったのだ。

あろうか。ともあれこの協議会の参会者が主張していることは、「日本」を中国に顕現するのにも少し一般的・通俗的な書物をもつてせよ、ということになろう。もつといえは一般的・通俗的な書物をもつてしても中国に対しては、アプリアリに「日本」を顕現できるとの「自信」の表明であるといえるのかもしれない。

先の批判についていえば、植民地中国に設立された日本図書館であつてみれば、そうしたある思想性をもった資料の蔵書構成は避けられないだろう、という気はする。「日本」をそこで表現しようとするば、やはり北京近代科学図書館で刊行された『叢刊』の形や銭稻孫の翻訳など、この図書館の諸活動は必然的道筋であつたとおもわれる。

それにしても横田の、「一向に関連性のない本ばかり」という批判は手痛い。また「古い本ばかり」という意見も、日本の近代科学という大きな主題をフォローし、また日本に関わる各分野の書物を概観して蒐集したという結果こうした批判がきたのであろう。確かに日本関係ということでは焦点がしぼりにくいのも事実であらうし漠としてつかみどころがなくみえたのかも知れない。書物を各分野の主題で横断して、日本という複合的テーマで集めるというところが、とりとめがなく関連性を欠いた蒐集にみえたのであろう。これは現代においても国内国外にいくつが存在する日本図書館や日本関係図書の蒐集機関にもあてはまる大きな課題であらうか。

この協議会の関連でもうひとつ興味をひかれることは、先に発言を引いた嘉治隆一が、北京近代科学図書館から二年遅れの一九三八年一月に創設なった海外日本図書館のひとつであるニューヨーク日本文化会館（図書館）に、四一年三月に館員として赴任したことについてである。両図書館とも当時の〈日本〉を海外に紹介する機関ではあったが、その米国に対する眼差しと中国に対するそれとは全く異なっている。もちろん、米国、中国ともそれぞれ、日本との関係はちがうし、文化や経済状態も異なっていた。また創設の場所もニューヨークのほうはロックフェラービルで各国の機関も多く存在しており、さらに開戦間際という状況に強いられて、日本経済や政治にかかわる照会も増加したりと実情に違いはあった。しかしながら、戦後の嘉治の回想にいう「日本に関するいい洋書は全部揃っていた」<sup>(30)</sup>という発言と、「通俗書物を支那語に翻訳してそっちへ送る」「あすこに集められた書物は支那人にとってかなり高級」といった米国、中国に対する嘉治の眼差しの差異は注目していいと思う。嘉治の、そしてまた日本（図書館）にとっての、米国と中国にたいする眼差しの異なりでもあったといえるのではないかな。

つまり、この時代の、米中両日本図書館の、書物を通じての〈日本〉の現出については、植民地中国においては「通俗書物を支那語に翻訳」することで〈日本〉を提示し得ると考えており、またこの時代のまがりなりにも到達した東亜の皇国〈日本〉を書物の集積を

もって現出しうるしまたすべきである、と考えていたのであろう。一方明治維新以降、日本近代形成の基層をなした西欧・米国にはそうした〈日本〉をアプリオリには提起できず、当初に買い揃えた洋書、主として東洋の異国ニッポンの伝統的文化を指し示す書物の現出にとどまったといえるのではないかな。こうしたことを逆にいうと、当時中国に顕現せしめようとしたある到達点たる東亜〈日本〉なるものは、世界にはまだまだ通用しない脆弱なものでしかなかったということを物語っているのではないかなと思う。

#### 四 むすび

この北京近代科学図書館は一九三八年一二月、監督官庁が外務省から興亜院にうつり、四二年には興亜院も大東亜省と改称、その都度予算も減額され苦しい経営が続いた。戦争末期には館員の補充もままならず囑託として中国人を雇い、日本人は館長の山室と会計の園田とのただ二人となった。その山室も昭和二〇年七月ついに応召となり、保定西南唐県の独立部隊に配属された。二等兵であった。応召の前々日、中国人館員の一人が家庭で送別会をしてくれたという。山室は旅行にいくからとしかいうわけにいかず、だが中国人には、これは応召だとわかっていたはずだ、とかれは回想している。<sup>(31)</sup>館長が二等兵で応召といい、中国人館員が事情をわかっていて送別会、といい北京近代科学図書館の中国における入り組んだ位置や、

この図書館の編み上げてきた性格を象徴する出来事であったといえるようか。この北京近代科学図書館の収蔵書は日本敗戦後の一九四六年、国民政府派遣文化接收員沈兼士により接收され、その幕を閉じた。以下北京近代科学図書館の蔵書のあらましを今一度列記しておく。<sup>(32)</sup>

蔵書は一〇万冊余で、宋氏寄贈の四部備要、沈氏仏教文庫三〇五種一〇一二冊、元北寧鐵路局長陳覺生氏の農業・経済関係遺蔵書五〇九冊、それに図書館がその蒐集方針としていた日本語の科学技術関係図書、日本の思想や文学その他の図書、欧文の日本研究図書・中国研究図書、中訳日文书類、和刻漢籍、絵巻物類複製品などである。その他フィルム、レコードや国際文化振興会から送付された日本美術・建築・庭園などのスライドがあった。

それに一九四一年、日本軍が清華大学を占領し野戦病院にした際図書館が預かることになった大学の蔵書があった。華北占領地区の図書・文物は、清華大学の蔵書・標本を中心に三〇万冊を軍が管理していたが、一九四二年七月軍利用の一部のものを除き、華北政務委員会に返還された。<sup>(33)</sup>その残された一部の軍管理図書を図書館が保管することとなったわけだ。そのいきさつは山室の回想によれば、軍が大学を占領すると日本の国策会社は競ってその資料を持っていくこうとする、そこで山室は大月中佐に「資料をそんなに散らすものでない」と進言、結果その図書を館で保管することとなった、と

いうことである。この図書は館員の佐藤三郎を中心に分類・整理され、蔵書印は本には押さずブックポケットに押印し、目録を三部作って軍・図書館・中国側教育部に保管されたという。和・洋合わせて二万五〇〇〇冊ほどであった。

また日中戦争開始後軍は占領地英米側の財産をも接收していったが、軍はその対応方を国策会社や関連機関を集めて協議、国策会社は自社で使用したいと主張、山室は各地域で保存すべきとの意見を述べた。結局図書は北京のものと後に天津のものも合わせて図書館に送付されることになり、やむなく新聞閲覧室や日語講座の部屋に収容した。北京地域の図書は当初総領事館の渡り廊下に山積、敗戦の色合いがこくなるにつれ総領事は処理に苦慮し、図書館側に引受け方依頼してきた。山室は予算も場所もないことだったが、ある夕方帰館するとトラックで図書館の庭に運ばれていたという。一〇畳いっぱいほどで量はいしたことはないが雑記帳に色紙の切り抜きを貼った子供のものまであり、山室は個人のものはいずれ返すべきと分類もせず棚にならべておいた。ところが山室が応召となり、帰還してみるとその接收図書類がなくなっている。戦後になって英米人が北京に戻り総領事館の接收した私物の調査がはじまった。総領事館から図書館に運ばれその後どうなったかということになり、その返答に大層苦慮した。事実は日本人のアルバイトとある中国人で全部本屋に売り払ったという。総領事館とは、「図書館へ送った」



「留守中のことは知らない」との押し問答で、それは戦後日本に帰国後まで続いたとのことである。<sup>(34)</sup>

こうした歴史的事実のほか北京近代科学図書館の存在を象徴する出来事は、図書館の文化活動を中国側から支えてきた錢稻孫が漢奸として逮捕され、裁判にかけられ懲役一〇年公民権剥奪六年の判決をうけたことであろう。すでに述べたように錢稻孫は該館の日語の講師でもあり、『書滲』に日本の文学作品の中国語訳を連載し『桜花国歌話』を出版し、この図書館のある象徴的存在でもあった。このかれの漢奸裁判はまさに錢稻孫の悲劇であり、また北京近代科学図書館の無残さでもあった。そしてそのことはたとえば、一九八七年に中国で日本文学叢書の一冊として刊行された錢稻孫訳の『近松門左衛門・井原西鶴選集』<sup>(35)</sup>に、錢の自序も紹介もなく本の表紙にすら錢の名前がないという事実、まさにこのようなたちで戦時下北京での文化活動が現在なお引き継ぎ、引き受けざるを得ないという、そうした事実がよく言い表わしている。

北京近代科学図書館は戦前期中国の日本図書館として活動をし、戦争のなか海外で〈日本〉を生きた。日本が、太古から大陸・中国より学び消化し築き上げてきた伝統文化と、そして近代化の過程でその基層に取り入れてきた欧米の政治・文化と、そして国のアイデンティティの模索という歴史・時代的情況に規定されて該館はその眼差しで日本を見、活動してきた。その蔵書や刊行物、書誌などの

諸活動はその生みの苦しみのなかで作り上げられてきたものであることは間違いない。本稿では、そうしたこの時代に現出した〈日本〉を北京近代科学図書館の収蔵書や諸活動、中訳日文書の歴史とその蒐集などを通じて概観してきた。中国でいよいよ盛んになってきた日本研究に、この戦前期の日本図書館の収蔵書がどういったかたちで受け継がれ利用されているか、また受け継がれず利用されてもいないのか、まだまだ調べなければならないことは数多い。

いずれにせよここでは、歴史の大波ののちへ遺されてしまった書物の、ある諸相に思いを巡らせてみたかった。

#### 注

- (1) 梅棹忠夫『対論「日本研究」——外国人の日本研究』講談社 一九八六年 一九七頁。
- (2) 国際交流基金編・刊。交流基金と中国社会科学院日本研究所が協力調査したものを同研究所がまとめたもの。
- (3) 岡村敬二「満鉄図書館蔵書集積の歴史 I・II」『図書館学会年報』三六巻一・二号 一九九〇年、参照。
- (4) パンフレット『中国国家図書館日本出版物文庫閲覧室』。
- (5) 北京外国语学院日本研究中心の蔵書は『図書資料部蔵書目録一九八五年—一九八八年』一九八九年、でみることができる。
- (6) 日本図書館については、岡村敬二「戦前期海外の日本図書館と

国際文化振興会』『大阪府立図書館紀要』二八号 一九九二年、参照。

- (7) 設立経過については小黒浩司「北京近代科学図書館史の研究 I・II」『図書館学会年報』三三巻三・四号 一九八七年、に詳しい。本稿の「設立経過」は主としてこの論文を参照させていた。

- (8) 『北京近代科学図書館一週年報告』昭和十二年・民国二六年館刊臨時号。

- (9) 藤田省三「天皇制のファシズム化とその論理構造」『近代日本思想史講座I』筑摩書房 一九七九年 三〇九頁。

- (10) 前掲拙稿「戦前期海外の日本図書館と国際文化振興会」参照。

- (11) 「本館・西城分館閲覧報告」『書滲』第一号 昭和十三年（一九三八）八月号。

- (12) 「本館日語学校のいろいろ」『書滲』第五号 昭和十四年（一九三九）三月。

- (13) 「一書信—中国の青年に触れて—」『書滲』第四号 昭和十四年（一九三九）一月号。

- (14) 「日本文化に関する国際懸賞論文募集事業報告」『日本文化の特質』日本評論社 一九四一年、『日本文化研究—紀元二千六百年記念国際懸賞論文入選作集』第一巻 国際文化振興会 一九四二年、稲垣守克「日本文化の特質に関する世界的懸賞論文」『国際文化』一五号 一九四一年。詳細は、前掲「戦前期海外の日本図書館と国際文化振興会」参照。

- (15) 土岐善麿は「万葉訳選」のなかで、「書滲」に連載のこれら錢稻孫の訳業について「僕は毎月の寄贈を楽しみに待っている」と

述べている（『斜面の悒鬱』八雲書店 一九四〇年）。

- (16) 石田幹之助「シリーズ日本学者紹介 錢稻孫先生のこと—二千年六百年記念論文集寄稿者」『国際文化』一九四〇年一月、目加田誠「洛神の賦」『目加田誠著作集』龍溪書舎 一九八六年など。

- (17) 『書滲』という誌名は職員からの募集により若い王卓常のものが採用された。「書籍が有する力の浸透作用」といった意味であった。なお二四号までの題字は錢稻孫の筆になり、以降は苦茶庵 周作人の題字にかわった。

- (18) 発行は中国留日同学会。

- (19) 『書滲』第四九号 一九四三年三月。

- (20) 「中国新刊図書目録—四、日本関係図書目録1・2」『書香』第七一八号 一九二九年一〇・十一月、加能三郎「素晴らしい支那の日本研究—『月刊日本研究』の発刊について」『書香』第一四号 一九三〇年五月、大谷武男「支那人の日本研究」『支那人の日本研究主要書目』『書香』第一三〇号 一九四一年五月など。

- (21) 実藤恵秀監修、譚汝謙主編、小川博編輯『日本訳中国書綜合目録』中文大学出版社 一九八一年。

- (22) 汪向榮著、竹内実監訳『清国お雇い日本人』朝日新聞社 一九九一年 二六頁。

- (23) 梁啓超『飲冰室文集』。引用は黄福慶『清末留日学生』中央研究院近代史研究所 一九七五年、より。

- (24) 前掲『清末留日学生』に一九〇二年現在の訳書彙編社の社員が一四名記されているが、そのうち一三名までが留日経験者である。

- (25) 周建人（一八八八—一九八四）は浙江紹興の人。魯迅の弟。商務印書館編輯者、『東方雜誌』『自然』など編輯。上海大学、暨南

大学などで生物学を教授する。

- (26) 鄭貞文(一八九一—一九六九)は福建閩候の人。日本に留学中に中国同盟会に加入。帰国後厦門集美学校教務長。のち商務印書館編輯所理化部主任。中訳化学名詞の仕事などに従事。

- (27) 丁福保(一八七四—一九五二)は江蘇無錫の人。南菁書院卒。京師大学堂、訳学館教習のち上海に医学書院を創設。

- (28) 『開館三週年紀念日本美術圖書資料展覧会目録 附中国人日本研究圖書展覧』北京近代科学図書館 一九三九年。

- (29) 国際文化振興会『対支文化工作に関する協議会要録 第七輯 支那』。

- (30) 「嘉治教授還暦記念座談会 アメリカ研究と私」『社会科学研究』一六一四 一九六五年。

- (31) 『山室三良氏インタビュー記録 北京近代科学図書館』(特定研究「文化摩擦」)聞き手…阿部洋 協力者…二見剛史 日時…一九七九年八月一日・一二月八日 一九八〇年。

- (32) 「北支の図書館 八、北京近代科学図書館」『書滲』第四一号 一九四二年、など。

- (33) 「北京清華大学の蔵書標本類返還」朝日新聞 昭和一六年七月一二日。なお「中支」地域の日本軍による接収資料については拙稿「戦時下中国の接収資料について」『大阪府立図書館紀要』第二七号 一九九一年、参照。

- (34) 日本による海外各地域での接収(押収または略奪)図書については戦後、連合軍からあいついで返還の指令文書がだされている(安達将孝「第一、二次世界大戦中における日本軍接収図書」『図書館界』三三卷二号 一九八一年六月)。

- (35) 蘇英哲「注目されつつある日本古典文学の中国語訳」『東方』一一〇号 一九九〇年五月 三二頁。